

聖書：ヨシュア記4章1～14節

説教題：永久の記念として

1 勢いづくイスラエル

モーセが死んだ後、ヨシュアが次のリーダーとして立てられました。指導者としてまだ何の実績もない中で、ヨシュアはイスラエルの民を率いてヨルダン川を渡らなければなりません。もし失敗すれば大事故になります。そうなればヨシュアはその責任を責められ、殺されることになるでしょう。

さいわいにして、神は奇蹟を起こされ、ヨルダン川の水をせきとめられ、人々は無事にヨルダン川を渡ることができました。川を渡る前にヨシュアは、「あした大いなる不思議が行われる」と宣言しました。人々はそのことを半信半疑で聞きました。けれどもすべてはヨシュアの言ったとおりにになりました。もうヨシュアの能力を疑う者はもうだれもいません。モーセが死んだとき、これからどうなるのだろうとだれもが不安を覚えました。ヨシュアが自分たちの羊飼いであることがわかりました。人々の心の中に大きな希望が輝きました。すべてがめでたしめでたしです。

2 石を取るの意味

そんなとき、主はこのように命じます。2、3節。「民の中から十二人、部族ごとに一人ずつを選び出し、彼らの命じて言え。『ヨルダン川の真ん中で、祭司たちの足が堅く立ったその所から十二の石を取り、それを持って来て、あなたがたが今夜泊まる宿営地にそれを据えよ』」

その理由についても詳しい説明があります。6、7節。「それがあなたがたの間で、しるしとなるためである。後になって、あなたがたの子どもたちが、『これらの石はあなたがたにとってどういうものなのですか』と聞いたなら、あなたがたは彼らに言わなければならない。『ヨルダン川の水は、主の契約の箱の前でせきとめられた。箱がヨルダン川を渡るとき、ヨルダン川の水がせきとめられた。これらの石は永久にイスラエルの記念なのだ。』」

ヨルダン川がせきとめられるというような奇蹟が起きたのですから、そのことを忘れないようにと記念に石を持ち帰る。その趣旨はなんとなくわからないでもありません。有名な観光地に行けば、必ず土産物屋さんがあり、記念になるような品々が置いてあります。十二の石を取るということも、そんな意味なのでしょう。そんな軽い話ではないはずです。ではどんな意味があるのか。このことを過去、現在、未来という三つのポイントに分けて見ていきます。

(1) 過去

まず過去のことから。ちょうど今受験シーズンですのでその事にたとえてみましょう。試験を受ける前はだれでもが不安になります。勉強する時間が足りないのではないかと。もっと違う分野にも力を入れて覚えておくべきではないかと。とにかく受験のことを考えない日はない。当日を迎えるまでいろいろな

心配をします。普段は信仰をもっていないのに、神にも祈りたくなります。さいわいにして無事に合格し、希望の学校に進むことができたときは天にも昇る気持ちになります。問題はその後です。しばらくは、合格の感激に浸っています。でもそのうちだんだん過去のことになり感激も薄れていき、それよりも、目の前の問題で精一杯になります。

ヨルダン川の水がせき止められるという奇蹟を自分の目で見たとき、人々は驚きました。自分の足で川を渡りおえたとき、感激しました。しかし、人間というものは忘れやすい。時間が経つうちに、神の奇蹟を経験したという感動はほこりをかぶっていきます。

だから石を持ち帰る必要があります。その石を見て思い起こすためです。そうでないと、自分がかつてヨルダン川を通過して救われたことを忘れてしまうのです。でももし石が、いつも身近においてあるならどうでしょうか。救われたのは幻でも、記憶違いでも何でもない。本当に過去に事実として起きた出来事であることを確認することができます。過去を思い出すために、石を残していきます。

(2) 現在

二つ目は現在というポイントです。人々は、神の奇蹟を目の当たりにしました。ヨシュアの指導力が確かなものであることも明らかになりました。希望の光が一気に射してきたような状態です。そうしたら人々の心はどうなるでしょう。この勢いに乗じ、すぐにでもエリコに攻め込むことができるのではないか。そんな気分がいつの間にか人々の心の中に芽生えていきます。というのは、神が奇蹟を起こされたのです。神が新しい指導者を与えたのです。こんなすばらしいことが次から

次へと起きています。自分たちが負けることなどあり得ない。そう思って当然です。そんな雰囲気の人々の心を支配しています。イスラエルは、数十万人から百万人とも言われる規模の集団です。一度勢いがつくと、前へ前へと突き進んでしまいます。そうなったら止めることが非常に難しくなります。大きな集団が、短い時間のうちに一つの方向を見て走り始めていきます。それはよいことなのでしょうか。

ルカの福音書の中に、悪霊が何千頭もの豚の群れの中に入り込んだとき、一斉に湖を目指して走り、多くの豚がおぼれ死んだという記事があります。悪霊のせいであなつたと断言することはできません。人は大きな群れとなると、一瞬にして危険な方向に向かって走り始めることがある。そんな警告です。

人々がヨルダン川を渡っている間、契約の箱は祭司たちの肩に担がれてずっと川の真ん中にあります。いつまた川の水が流れ始めるかわかりません。だれだって急いで川の向こう側に行こうとしたでしょう。後戻りするなどということは考えられません。

ですから、主の命令を聞いて耳を疑いました。十二人が川の真ん中に戻ってきて、大きな石を川底から運び出すようにという命令です。小さな石ではありません。背中にかつがなければならぬほどですからそれなりの時間がかかります。

人々は、興奮状態にあります。前へ前へと焦るようにして突き進もうとしています。それがどれほど危険であるのかを主は知っておられました。だから後戻りさせます。祭司たちが立つ足もとから石を運び出させます。前だけを見るのではありません。後ろをふり返ります。主の契約の箱がどこにあったのか。

もういちど目で確認させ、気持ちを落ち着かせていきます。

(3) 未来

三つ目は未来というポイントから見ます。すばらしい体験をすると、だれでもそうですが、それは自分の身に起きたことととらえます。ところが聖書を見ると、どうもそのような見方では足りないようなのです。6, 7 節にあるように、子どもたちにもきちんと教えていく必要がある。今の世代の人たちだけではない。次の世代にも神が起こされた奇蹟、救いの事実を伝えなければならないというのです。

ヨルダン川の川底から運んできた石は十二部族ごとに町や村に運ばれ、その真ん中に立てられます。子どもたちがその石を見て「この石はなにか」と質問ができるようにということです。石を見ながら子どもたちは育ちます。石にまつわる神の奇蹟について何度も繰り返し、聞かされます。そのようにして神の救いは子どもたちにも受け継がれていきます。

一つの石に、このようにいろいろな意味が込められていました。

3 聖餐の意味

では今、その石はどうなったのでしょうか。ヨシュアの時代は今からおおよそ三千五百年前と言われます。長い年月の間に、石の行方はわからなくなりました。もう石は必要がないのでしょうか。そんなことはありません。いまは石ではなく、もっとすばらしいものとなって私たちに受け継がれています。皆さんもご存じの聖餐式です。

主は、パンを裂いて「これはあなたがたの

ための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい」と言われました。杯を分け与えて、「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい」と言われました。「わたしを覚えて」とあります。

私は昔から形式的なことは大嫌いで、入学式も卒業式も成人式も意味はないと思っていました。その延長で、まだ救われて間もないころですが、聖餐式も意味はないと思い込んでいました。

しかし、聖餐式は単なる形式なのではないとじょじょに教えられていきました。主の深い配慮が聖餐に込められていることに気がつきました。自分が救われたことをいつの間にか忘れていくのです。何から救われたのか。どのようにして救われたのか。あいまいになりやすい。だから毎月私たちは思い起こすために聖餐に招きます。

聖餐式は、世の人々からは無駄なことには見えません。目の前にあるのはただのパンと杯に過ぎないのです。目で見えるところでは何も変化は起きません。でも、私たちは聖餐にあずかる時、自分のころをもう一度探られていくのではないのでしょうか。聖餐の招かれる、それにふさわしい歩みをしてきたのかどうか。自分の力、自分の思いで前に突き進もうとしていた自分を振り返ります。罪を繰り返していた自分を認めざるを得ません。そのとき、主の御からだと血潮が必要であることを覚えます。そして与えられている恵みの豊かさに目が開かれていきます。

また、聖餐は救われた者のためにだけあるのではないことも教えられます。子どもたちがこの聖餐を見えています。まだ救われていな

い人たちが見えています。見た人たちは、不思議そうに尋ねるでしょう。この聖餐にはどんな意味があるのですか。そのとき、私たちは自分を救ってくださった主の恵みを証しすることができます。

ヨシュアの時代、救いは「石」という目に見える形として受け継がれていきました。私たちは、主の救いをパンと杯をともに味わいながら受け継いでいきます。

主がどれほど私たちのことを配慮してくださっていたのか。その豊かさに感謝します。